

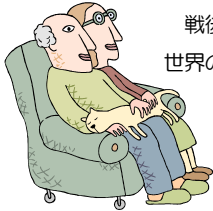
老賢者を生きる

永田 円了

Unlearned Wisdom

人は組織からの卒業や引退はありえても、自分自身から引退することはできない。かくいう私も還暦をはるかに越え、組織からは、もう何年も前に引退した。子どもたちも手がかからなくなった。さあ、これからどうする、老いに身をまかせて、ひょうひょうと生きるか、まあ、それもいい。でも、何かあるだろう。人生の折り返し地点を過ぎたからこそできることが、このときこそ、自らの中に潜む老賢者のコトバに耳を澄ませる必要があるのでは、と思う。

高齢化する世界

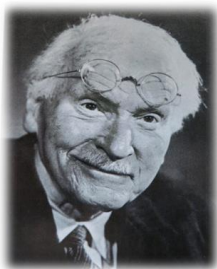


戦後世界の平均寿命は25年も伸びた。世界中で今高齢者が若者の数を上回ろうとしている。2050年までには、世界の多くの国で、60歳以上の人口が全体の1/3以上を占めるようになると予測されている。そして、その時までに社会を変える必要があると専門家はいう。メディアは口をそろえて、高齢化社会に対応するためには社会制度を変えよ、老後の蓄えの問題を深刻に報道する。制度を変えれば、人間も変わるのだろうか。私はそうは思わない。変えるべきは、人間一人ひとりの意識のはずである。

老象の知恵

人間というものは、自分が存在することで周囲の誰かに“役立っている”という感覚なしに正気を保つことは、ほとんど困難な動物であるという。普通生き物は、繁殖を終えると死んでいく。しかし人間は例外的に、他の動物と比べて長命な生き物だという。例外としては、象やイルカは繁殖期を終えた後も、人間のように長命である（霊長類研究家・正高信男）。では、人間以外の、例えば、象は高齢化の問題をどう乗り越えているのであろうか。

ここに、スリランカで起こった面白い事例がある。数年前のインド洋で起こった大津波、多くの人命が失われたが、スリランカの象は一頭も死ななかったという。何故だったのか。津波が押し寄せてくる前に、低い周波数の音がするという。人間には聞こえないこの音波を、象が察知していたのであった。象といっ



ても、普通は下位にいる年若い老象であった。若い象には、この音が聞こえても、津波と結びつけることはできなかった。しかし老象は長い過去の経験からこの危険をいち早く察知し、象の群れを山の上に非難させたのであった。長い人生を経験したからこそ、いざというときに“役に立つ”知恵がある。

自分の中の老賢者

老賢者とは心理学者ユングのコトバである。老いることによって、より賢くなっていく。それは、皆より数学ができるとか、良い点がとれるとか、という学校賢者ではなく、生きることに賢くなるということである。人間の肉体は、どうしても老いていくもの。巷では、年をとっても元気である方法とか、この薬を飲めば若さを保てるなどと、肉体の老いはかりを気にかけている。

本当の問題は、我々の心の中の老賢者は、どれだけ育ててきたか、が大事であろう。老賢者とは、周囲から学んだ知識・知恵を、いったん自分の頭から降ろし(Unlearn)、もう一度組み替え、学びほぐされた知恵として活用できる人のことである。

<事例 DVD等>

NHK 団塊世代の老後破産

正高信男 / 老いはこうしてつくられる / 老象の知恵

桂歌丸 / 人生の終わりがた / それはどう生きたかで、

鶴見俊輔 / ハレンケラーとの出会い / Unlearn

河合隼雄 / ユングの老賢者を語る / 混沌—秩序—混沌

小野田寛郎 / 終戦後29年間のルバング島 / 後ろを振り向かない

ころこの時代 / 花田春兆(83歳) / 天の邪鬼の視点で生きる

歌・竹内まりや / 人生の扉 / 君のデニムがあせてゆくほどに、

円了のホームページ：www.enryo.jp

花田春兆

いくつになったら歩けるの



ほんだしゅんめい